

イザヤ書24-26章「イザヤの黙示録」

1A 地の面の覆し 24

1B 地の背きの罪 1-20

1C 荒らされる地 1-6

2C 過ぎ去る世の楽しみ 7-13

3C ほめ歌と住民への落とし穴 14-20

2B 力ある者への裁き 21-23

2A 救いの喜びと楽しみ 25

1B 横暴な者たちの沈黙 1-5

2B 万民への宴会 6-12

3A 信仰による義人の道 26

1B 強固な都 1-6

2B まっすぐな道 7-14

3B 一時的な苦難 15-21

本文

イザヤ書 24 章を開いてください。私たちは、13 章以降、周辺の国々に対する主の宣告の部分を読んできました。その前、6 章から 12 章までにはイスラエルとユダに対する神の言葉がありました。そして最初の 1-5 章は、エルサレムとユダのみに対する預言でした。ですから、主のイザヤに対する幻が広がっているのが分かります。初めはエルサレムとユダ、次にイスラエル全体、それから周囲の国々です。そして 24 章から 27 章は全地、全世界を舞台にしています。ちょうどこれは、使徒の働きにおけるイエス様の約束と似ています。初めはエルサレム、ユダヤから始まり、次にサマリヤ、そして地の果てにまでイエス様の証人となるという約束でした。イザヤも、その地域から世界への拡大する神の幻を受け取っています。今日は、時間の関係から最初の 3 章を学んでいきます。

1A 地の面の覆し 24

1B 地の背きの罪 1-20

1C 荒らされる地 1-6

24:1 見よ。主は地を荒れすたらせ、その面をくつがえして、その住民を散らされる。24:2 民は祭司と等しくなり、奴隷はその主人と、女奴隷はその女主人と、買い手は売り手と、貸す者は借りる者と、債権者は債務者と等しくなる。24:3 地は荒れに荒れ、全くかすめ奪われる。主がこのことを語られたからである。24:4 地は嘆き悲しみ、衰える。世界はしおれ、衰える。天も地とともにしおれる。24:5 地はその住民によって汚された。彼らが律法を犯し、定めを変え、とこしえの契約を破ったからである。24:6 それゆえ、のろいは地を食い尽くし、その地の住民は罪ある者とされる。

それゆえ、地の住民は減り、わずかな者が残される。

24 章から 27 章は、しばしば「イザヤの黙示録」と呼ばれています。ヨハネによる黙示録が聖書の最後に載っていますが、そこには世の終わりが啓示されています。それは真新しい考えではなく、むしろ私たちの主が初めから前もって語っておられたことです。十字架に付けられる前、オリブ山の上でもイエス様は語っておられました。「マタイ 24:21 そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。」

これまで、私たちはイスラエルの周辺国における騒動を見てきました。国々の揺れ動きを見ました。ペルシヤによって倒れるバビロン、そしてアッシリヤによって攻められる国々を見て、彼らが自分の安定した生活、この世に安住して神に拠り頼んでいなかったことを明らかにされました。主は最後には、それをも超えて、この地上の面そのものを揺り動かします。人が生きていることを保障する、最も安定していなければいけない地面、これを揺り動かされるのです。

これは、地上にいる者たちに根源的な神からの問いかけになっています。私たちは自分を保たせているのは、社会的地位、経済的地位、また宗教的な習慣です。自分が生きていることを、これらの立ち位置によって確認します。しかし、多くの人が問わないのは、人は同じように裸で生まれ、同じように何も財産を持っていくことができず死んでいくことです。そこにおいては、全く差別がありません。しかし、この真実に目を意図的に向けません。そこで主は、地の面を揺り動かされる時に、社会的な地位の違い、経済的な地位の違い、そして宗教的な位置の違い、これらを無くしてしまわれます。大きな揺れの中で、だれもが同じ、神の前で裁きを受けなければいけない者なのだ、ということを教えられるのです。最後の審判において、そのことを神は示しておられます(黙示 20:11-12)。

そして、その理由が大事です。5 節がそれで、「地はその住民によって汚された。彼らが律法を犯し、定めを変え、とこしえの契約を破ったからである。」とあります。人にとって、いろいろな課題がありますが、何が最も大事なことなのか、それは主を知り、この方の言葉を知ることです。この関係に立ち戻るために、主はあらゆることを行なわれています。その最後が地を揺り動かすことなのです。恐ろしいのは、神の裁きの激しさではありません。そうではなく、これだけはっきりした徴を与えられているのに、それでも人間は全能者に反抗することです。黙示録には、大患難において激しい災いを下されることが書かれています。その中での人々の反応が次です。「16:9 しかも、彼らは、これらの災害を支配する権威を持つ神の御名に対してけがしごとを言い、悔い改めて神をあがめることをしなかった。」人が全能者に向ける心の頑なさ、またその高ぶりが人を滅ぼす第一原因です。

世界には、カインがアベルを殺した時以来、地上に血が流され、その不法と罪がはびこりました。私たちは悪や罪を隠すことができるかもしれませんが、ここにあるように地は知っています。今、

生きている私たちも、何千年前に生きている私たちにも、神は私たちにご自分の掟を与えておられました。ここで言っている「律法」や「とこしえの契約」とは、必ずしもイスラエルに与えられたモーセ律法や契約のことではありません。異邦人であっても知っている神の掟です。例えば、「殺してはならない」というのはどの文化、どの国に行っても同じです。「姦淫してはならない」というのもそうです。性行為というのが、男と女の結婚の中で祝福されるというのも、正しい良心においては、そうなのだと分かっているのです。しかし、こうした掟を破っているだけでなく、その掟さえ自分の欲望に合わせて変えてしまいます。最近の同性婚の合法化への流れはその通りです。

そして、「地の住民は減り、わずかな者が残される。」とあります。大患難の後にはわずかな者たちだけが地上に残ります。現在、シリアの内戦においてその全住民の半分が国外に逃げたと言っていますが、終わりの日は全世界で人々が逃げようにも逃げられず死んでいきます。そして、わずかな者たちだけが残ります。そのわずかな者たちに対して、主が何を行なわれるかは後で見えていきます。

2C 過ぎ去る世の楽しみ 7-13

24:7 新しいぶどう酒は嘆き悲しみ、ぶどうの木はしおれ、心楽しむ者はみな、ため息をつく。24:8 陽気なタンバリンの音は終わり、はしゃぐ者の騒ぎもやみ、陽気な立琴の音も終わる。24:9 歌いながらぶどう酒を飲むこともなく、強い酒を飲んでも、それは苦い。24:10 乱れた都はこわされ、すべての家は閉ざされて、はいれない。24:11 ちまたには、ぶどう酒はなく、悲しみの叫び。すべての喜びは薄れ、地の楽しみは取り去られる。24:12 町はただ荒れ果てたままに残され、城門は打ち砕かれて荒れ果てる。24:13 それは、世界の真中で、国々の民の間で、オリーブの木を打つときのように、ぶどうの取り入れが終わって、取り残しの実を集めるときようになるからだ。

世の楽しみが終わります。黙示録 18 章の終わりにも、大きな都バビロンが滅ぶので人々の楽しみが過ぎ去ることが書かれています。このように陽気に楽しむことが必ずしも悪いことではありません。もちろん酒乱や遊興は肉の行ないですが、神の国では大きな宴会が設けられる預言が後で出てきます。ここでの問題は、このような世の楽しみによって神を覚えないということでした。この前、ある姉妹が信仰を持つ前の自分について分かち合ってくださいました。旅行に行ったり、グルメをしたり、周りの人々はそうやって今のことしか考えていないけれども、私も以前はそうだった。それは空しく、心に不安があったが、それを隠そうとしてなおのこと楽しみを追及していた、とのことです。主が、それが偽りの楽しみであることをこのようにして暴かれます。

3C ほめ歌と住民への落とし穴 14-20

24:14 彼らは、声を張り上げて喜び歌い、海の向こうから主の威光をたたえて叫ぶ。24:15 それゆえ、東の国々で主をあがめ、西の島々で、イスラエルの神、主の御名をあがめよ。

大患難が終わる時、主が地上に戻られる時、選ばれた民を集められます。イエス様が言われま

した、「マタイ 24:30-31 そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。人の子は大きなラツパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。」イスラエルの民は世界中に離散しています。大患難において、彼らの多くも殺されますが、それでも残された者たちは、来臨の主イエスによって救われます。そして、世界のどこにいても、彼らはエルサレムに再び集められるのです。その彼らが、東の国々からも西の島々からも、至るところで主をほめたたえているのです。

そしてまた、ここには大患難時代を生き抜いたわずかな異邦の民もいることでしょう。その中には、イスラエルの神を認め、御国に入ることの許された人々もいます。その彼らが世界の各地で主をあがめています。

この喜びの歌は、今の私たちキリストを信じるすべてが共有できる歌です。この世界がいかに暗くならうとも、私たちには救い主であられるイエス様の希望があります。むしろ、終わりに近づけば近づくほど、主なる神のみが救う方であること、この方だけが人々が信ずべき神であることを知るように、神が仕向けておられます。私たちが、この世とは別の反応をすることによって、その違いがさらに浮き彫りになるのです。私たちが、一同が集まって賛美する時に、それを感じるでしょう。多くの人々が集まって賛美するなら、尚更のことです。

24:16 私たちは、「正しい者に誉れあれ。」という地の果てからのほめ歌を聞く。しかし、私は言った。「私はだめだ、私はだめだ。なんと私は不幸なことか。裏切る者は裏切り、裏切り者は、裏切り、裏切った。」24:17 地上の住民よ。恐れと、落とし穴と、わななどがあなたにかけられ、24:18 その恐れのかげから逃げる者は、その落とし穴に落ち、落とし穴からはい上がる者は、そのわなに捕えられる。天の窓が開かれ、地の基が震えるからだ。24:19 地は裂けに裂け、地はゆるぎにゆるぎ、地はよろめきによろめく。24:20 地は酔いどれのように、ふらふら、ふらつき、仮小屋のように揺り動かされる。そのそむきの罪が地の上に重くのしかかり、地は倒れて、再び起き上がれない。

主を信じる者たちには、信仰によって義と認められた者たちに与えられた誉れを受けますが、預言者イザヤの思いはとて複雑でした。主の御名を呼び求める喜びに共感できる一方、これから襲ってくる地上にいる者たちへの災いを思うと、至ってもいられない、嘆き悲しんでいるのです。そして先ほど例えたように、地上にいる者たちは逃れようにも逃れることができません。全地が揺れ動くのですから、逃げようと思ったらその逃げたところにも罠があるわけです。そして、ここは霊的にも同じでしょう。人々が、主なる神、救い主以外のところに何かを求めるなら、またその求めたところも自分にとっては罠となります。

2B 力ある者への裁き 21-23

24:21 その日、主は天では天の大軍を、地では地上の王たちを罰せられる。24:22 彼らは囚人

が地下牢に集められるように集められ、牢獄に閉じ込められ、それから何年かたって後、罰せられる。24:23 月ははずかしめを受け、日も恥を見る。万軍の主がシオンの山、エルサレムで王となり、栄光がその長老たちの前に輝くからである。

「その日」という言葉が出てきました。主が最終的にご自分のことを完了させる、ご自身で定められた日です。主は、地を揺り動かし、また天をしおれさせた後に、天においても、地においても力ある者たちを罰せられます。天においては、神に反抗した悪の勢力があります。黙示録 12 章において、竜つまりサタンとそれに従う三分の一の天使を引きつけて、天使長ミカエルとの戦いで敗れ、地上に落とされることが書かれています。そして主が来られると、サタンは底知れぬ所に鎖でつながれます。「黙示 20:1-3 また私は、御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手を持って、天から下って来るのを見た。彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕え、これを千年の間縛って、底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようにした。サタンは、そのあとでしばらくの間、解き放されなければならない。」ここに、彼らが牢獄に閉じ込められ、地下牢に入れられることが書かれていますが、底知れぬ所に千年間いるのです。千年後に、火と硫黄の燃える池に投げ込まれます。

そして、「地上の王たち」とありますが、彼らも同じように再臨の主によって罰せられ、ハデスに下り、千年後に最後の審判によって、火と硫黄の池に投げ込まれることとなります。大患難において、地上の王たちは反キリストの誘いによって、ハルマゲドンに集結します。そして、最終的に再臨のキリストと戦いを交えます(黙示 19:19)。反キリストともう一人の偽預言者は、その戦いに負けた後で直接、火と硫黄の池に投げ込まれます。彼らの仕業は他の王たち以上に悪いもの、反逆を指揮した罪で重かったからです。

ところで、生き残った者たちについてわずかな者たちだけが残ることについてお話ししました。マタイ 25 章 31 節以降を読みますと、ただ生き残っただけでは神の国の中に入ることはできないことを教えてくれています。羊と山羊を選び分けるように、国々を右にそして左に選り分けます。そして弱い者、迫害された者、貧しい者、事欠いていた者たちに良くしてあげた者たちは、イエス様は彼らをわたしの兄弟と呼ばれて、ご自身にしたということで御国の中に入れます。そうでない者たちは、永遠の刑罰の中に入ると言われます。この大患難の場では、それら弱くされている者たちとは迫害を受けている選ばれた民、ユダヤ人の残りの者たちでありましょう。イエス様の肉の兄弟です。いずれにしても、自動的に御国に入るわけではないこと、必ずすべての人が御子の前に立って、この方に何をしたのかという物差しによって、御国に入るのか永遠の地獄に投げ込まれるのかが決まるのです。

そしてイエス様が、地上に戻って来られ、エルサレムから君臨されます。「月ははずかしめを受け、日も恥を見る。」という表現がとてもユニークがありますが、それは天における栄光と言えば、太陽の光、月の光ですが、これらさえ暗くなるような、何の輝きも見えなくなるような、主ご自身の栄光

の輝きがエルサレムを満たすからです。なんというすばらしい光景でしょうか！私たちの間でも、キリストがこれだけの輝きを持っていれば幸いですね。誰かがどうしたのか、ということではなく、主ご自身のすばらしさだけがほめたたえられることを願います。

2A 救いの喜びと楽しみ 25

こうしてシオンの山に主イエスご自身が王座に着かれて、神の国が始まります。御国が始まったことを驚き、賛美しているのが 25 章であります。

1B 横暴な者たちの沈黙 1-5

25:1 主よ。あなたは私の神。私はあなたをあがめ、あなたの御名をほめたたえます。あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、忠実に成し遂げられました。

神の国、その祝福された国が建てられることは、数々の預言者が語り続けたことでした。アブラハムに対して、「あなたによって、すべての民族は祝福される。」との約束を与えておられました。けれども決して、そのようにはなっていなかった。しかし今、このようになったことを感謝して、賛美しているのです。

ここにあるように、この計画は「不思議」です。私たち人間の思うところをはるかに超えて、実現した国だからです。主がなされることは、不思議なのだということを知ることは大切です。「1コリント 2:9 まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮んだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」」そして真実な方です。どんなに時が経とうとも、主はご自分の結ばれた契約を忘れることは決してありません(例:レビ記 26 章 42 節)。イスラエルが反抗に反抗を重ねて、彼らが地の果てに散らされた後に、主は、でこう言われています。何千年経っても覚えておられるのです。ましてや、私たちに対して持つておられる約束は、必ず実現させていただきます。

25:2 あなたは町を石くれの山とし、城壁のある都を廃墟にされたので、他国人の宮殿は町からうせ、もう、永久に建てられることはありません。25:3 それで、力強い民も、あなたをほめたたえ、横暴な国々の都も、あなたを恐れます。25:4 あなたは弱っている者のとりで、貧しい者の悩みのおきのとりで、あらしのときの避け所、暑さを避ける陰となられたからです。横暴な者たちの息は、壁に吹きつけるあらしのようだからです。25:5 砂漠のひでりのように、あなたは他国人の騒ぎを押え、濃い雲の陰になってしずまる暑さのように、横暴な者たちの歌はしずめられます。

祝福と平和を神は約束されていたのに、地上は騒ぎで一杯です。それは、主に服従しないで反抗している力が存在するからです。その反抗している力を抑え込み、押しつぶしてしまうのが再臨の主がなされることです。そして、この地を弱い者、貧しい者のために備えてくださるというのが、神の御心であります。したがって、福音を信じる時に私たちが心を貧しくしなければならなかったこ

と、そして信じた後もこの世がかえって住みにくいところ、押しつぶされてしまうような圧力と圧迫を感じているのであれば、それは幸いであるとイエス様が言われました。そしてこの世の流れに乗って生きている人々は、前回のツロに対する預言のように、そして 24 章にある世の楽しみのように、それがつぶされるので涙と嘆きに変わります。

イエス様の御国に入るための説教では、貧しい者が幸いであり、神の国に入る。泣いている者が慰められる。そしてイエス様のゆえに、迫害される者は大きな報いを天において受けます。反対に、今、富んでいる者は哀れであり、食べ飽きている者は哀れであり、今、笑っている者は後に悲しみ泣くようになると言われました(ルカ 6 章 20-26 節)。

2B 万民への宴会 6-12

25:6 万軍の主はこの山の上で万民のために、あぶらの多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、髓の多いあぶらみとよくこされたぶどう酒の宴会を催される。

キリストが御国を立てられた後に、行なわれるのがこの宴会です。喜びを表し、神の救いを楽しむために、宴会を行ないます。イエス様もこのことについて、不信者のユダヤ人に語られました。「マタイ 8:11-12 あなたがたに言いますが、たくさんの人が東からも西からも来て、天の御国で、アブラハム、イサク、ヤコブといっしょに食卓に着きます。しかし、御国の子らは外の暗やみに放り出され、そこで泣いて歯ぎしりするのです。」神の国の子らとされるユダヤ人であっても、イエスを認めない者は御国には入れず、外の暗闇、つまり地獄に行きます。けれども、異邦人であってもイエスを主と認める人であれば、ここ 6 節にもあるように万民が、あらゆる国々の人々がこの宴会にあずかることができます。

25:7 この山の上で、万民の上をおおっている顔おおいと、万国の上にかぶさっているおおいを取り除き、25:8 永久に死を滅ぼされる。神である主はすべての顔から涙をぬぐい、ご自分の民へのそしりを全地の上から除かれる。主が語られたのだ。25:9 その日、人は言う。「見よ。この方こそ、私たちが救いを待ち望んだ私たちの神。この方こそ、私たちが待ち望んだ主。その御救いを楽しみ喜ぼう。」

彼らは何を喜び楽しんでいるのでしょうか？何をもって、祝会を開いているのでしょうか？そうです、「御救いを楽しみ喜ぼう。」とあるように、イエス・キリストにある神の救いを喜んでいるのです。午前中話しましたが、「ルカ 15:10 ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」とあります。そして、私たちはキリストにこそ神の救いがあると信じており、イエスを王としている中で、喜びと楽しみがあるのです。セレブレーションには、わずかな人数ですが、それでもいつもより多い人々が集まり、喜びが倍増しました。

そして、ここで万人と強調していることに注目してください。アブラハムに主が「地上のすべての

民族は、あなたによって祝福される。(創世記 12:3)」とあるように、イスラエルだけでなく、全ての人のために用意されています。そして、万人の覆いを取り除いてくださるとあります。これは聖霊の働きによる者です。どんなに私たちは福音を説得しても、この世の神による覆いがあるために人々が信仰を持たないでいます。「2コリント 4:4 そのばあい、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。」しかし、人が主に向く時に、御霊によってその覆いが取り除かれます(2コリント 3:16-17)。

そして素晴らしい約束がここにありますね。「永久に死を滅ぼされる。」と言われるのです。神は、初めにキリストを死者の中から甦らせることによって、死の滅ぼしの働きを開始されました。それから、キリストにつく者が甦り、彼らも朽ちない体を着るので死にません。それから、コリント第一 15 章 26 節に、「最後の敵である死も滅ぼされます。」とあります。新しい天と新しい地において、全被造物にも死がない状態とされます。さらに、主なる神が「すべての顔から涙をぬぐ」ってくださると約束されています。なぜなら、死が私たちに悲しみと涙をもたらすからです。元々、人は死ぬようには造られていませんでした。生きているのに死ななければいけないという不条理があります。これは罪がもたらしたものです。しかし、神は最終的に取り除いてくださいます。

そして、「ご自分の民へのそしりを全地の上から除かれる。」とあります。これは、主に選ばれた民、ユダヤ人たちに対する言葉です。神を信じるユダヤ人がこれまで、神を敬まわない者たちから誹りを受けていました。しかし、それがここでは取り除かれます。私たち異邦人であっても、キリストを信じていれば誹りを受けません。しかし、かの日に取り除かれます。先に話したイエス様の説教にも、「その日には、喜びなさい。おどり上がって喜びなさい。天ではあなたがたの報いは大きいからです。」とあります。神の国において、確かこの方がキリスト、救い主であることを知る時が来ますが、そのように信じて報われる時がやってくるのです。今は苦しみますが、それもまたキリストから賜物として受けていることをパウロはピリピ 1 章 29 節で教えています。

25:10 主の御手がこの山にとどまるとき、わらが肥だめの水の中で踏みつけられるように、モアブはその所で踏みつけられる。25:11 泳ぐ者が泳ごうとして手を伸ばすように、モアブはその中で手を伸ばすが、その手を伸ばしてみるごとに、主はその高ぶりを低くされる。25:12 主はあなたの城壁のそそり立つ要塞を引き倒して、低くし、地に投げつけて、ちりにされる。

モアブは、シオンの山、エルサレムの東、死海の東にある国です。イスラエルの国にモアブは隣接しているのですが、「自分は大丈夫だ」とする高ぶりによってキリストを認めなければ、たとえ近くにしようと、その救いに預かれないことをここでは教えています。ここは、はっきりしています。神の御国には至福があるのですが、キリストを認めない者たちは、その近くにいっても悶え苦しみます。ラザロと金持ちの話でも、金持ちはハデスで苦しみのところで悶えていながら、慰めのところにいるアブラハムに語る事ができました。けれども、その間には大きな淵があり、行き来ができません(ルカ 16:26)。そして、新天新地においても、不信心な者は外に追い出されるとはっきりと語られ

ています(黙示 22:15)。

3A 信仰による義人の道 26

そして 26 章に入ります。イエスが王となられ、その山で大宴会を催されますが、そこに入る者たちの心の状態を次に教えています。

1B 強固な都 1-6

26:1 その日、ユダの国でこの歌が歌われる。私たちには強い町がある。神はその城壁と塁で私たちに救ってくださる。26:2 城門をあけて、誠実を守る正しい民をはいらせよ。26:3 志の堅固な者を、あなたは全き平安のうちに守られます。その人があなたに信頼しているからです。26:4 いつまでも主に信頼せよ。ヤハ、主は、とこしえの岩だから。

主がおられるエルサレムに入る者は、神の救いを待ち望み、この方に全幅の信頼を寄せている者たちであります。「誠実を守る」とは、十分に信じてというような意味合いがあります。十分に信じているので、その信仰を神は正しいとみなしてくださっています。そして、志が堅固というのは、主に対して魂を明け渡していることを指しています。主に自分の全てをゆだねた者であります。そうした者を、主は全き平安で守ってくださるのです。

チャック・スミスが、ある時に宗教の論議をするところに招かれたそうです。そこには知識人が多く集まっていたのですが、何だかよく分からない、難しい議論が延々と続いていました。何も話す余地はないな、と半ばあきらめていたところ、一人の女性が、「せっかく牧師さんをお招きしたのですから、話すのではなく、耳を傾けてみましょう。」と言ったそうです。それで、チャックはこう言い出しました。「私には、心に全き平安があります。」それでその場はしん静まりました。全き平安など、到底、誰も言えなかったからです。そこで、キリストが十字架の上でしなれたこと、そこで永遠の救いを成し遂げてくださったことを語ったのだと思います。その場でイエス様を信じて、受け入れる人が起こされたそうです。人々は、「これはどうか、あれはどうか。」と焦ったり、不安になって、いろいろと模索している中で、私たちには神の恵みによる、キリストの完全な救いがあります。永遠の救いですから、それは完全なのです。私たちは、他の宗教者がたくさん修行してそれでも得られないものを、今、キリストにあってその全てを得ているのです。

26:5 主は高い所、そびえ立つ都に住む者を引き倒し、これを下して地に倒し、これを投げつけて、ちりにされる。26:6 貧しい者の足、弱い者の歩みが、これを踏みつける。

主ご自身を安全の拠り所とするのではなく、他のものを拠り所とする人々は、どんな高い所にも引き倒されます。そして、自分をこのように高くする時に、だれか他の人々を引き落としていきます。自分を高くするために、他者を引き落としているのです。しかし神の国では異なります。私たちは自分を高くする必要はありません。むしろ、自分が低くならないといけないのです。高くするのは、

あくまでも主ご自身です。主が引き上げるのですが、私たちは自分を低くしなければいけません。神の国は、このように貧しき者、弱い者が力を持つ領域です。

2B まっすぐな道 7-14

26:7 義人の道は平らです。あなたは義人の道筋をならして平らにされます。26:8 主よ。まことにあなたのさばきの道で、私たちはあなたを待ち望み、私たちのたましいは、あなたの御名、あなたの呼び名を慕います。26:9 私のたましいは、夜あなたを慕います。まことに、私の内なる霊はあなたを切に求めます。あなたのさばきが地に行なわれるとき、世界の住民は義を学んだからです。

私たちは以前、大路についての幻を読みました。「11:16 残される御民の残りの者のためにアッシリヤからの大路が備えられる。イスラエルがエジプトの国から上って来た日に、イスラエルのために備えられたように。」とあります。当時の人々にとって、舗装された道路というものはありませんから、平らな道、まっすぐな道というものはとても貴重でした。そこかれ靈的にも、神を信頼することによって義と認められた者たちの道は、平らなのだ、つまり倒れることはない、と教えているのです。詩篇にも祈りとして、このようなものがあります。「27:11 主よ。あなたの道を私に教えてください。私を待ち伏せている者どもがおりますから、私を平らな小道に導いてください。」ところで、このことは苦しみがない、楽な道だということではありません。そうではなく、シンプルな道だということの意味しています。イエス・キリストを信じていく道は、シンプルです。何か自分で細工をしながら歩いていく道ではなく、ただ神に拠り頼んで、その前に備えられた道を歩むというシンプルさがあります。

そして、このようにして主を信じ、主を待ち望んでいるのですから、神が報いを与えてくださることを期待しています。自分ではなく、神がしてくださることを待っているのです。イエス様が山上の垂訓で言われた通りです、「義に飢え渴いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。(マタイ 5:6)」自分で義を立てるのではなく、神の与えられる義を待ち望んでいるのです。パウロもこの立場について、ピリピ書から次のように述べています。「3:9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」そして、この待つ行為が、たとえ夜であっても、つまり暗き世であっても、それでも信仰をもって待っているということでもあります。今、見てきた神の義が地上で行われるその幻を見たので、これが将来に約束されていることを信じて、今を生きるのです。

26:10 悪者はあわれみを示されても、義を学びません。正直の地で不正をし、主のご威光を見ようとしません。26:11 主よ。あなたの御手が上げられても、彼らは認めません。どうか彼らが、この民へのあなたの熱心を認めて恥じますように。まことに火が、あなたに逆らう者をなめ尽くしますように。

正しい者と対比して、悪者に対する思いを述べています。悪者の定義を見てください、「あわれみを示されても、義を学びません。」であります。何が悪を構成しているのか？それは、神の憐れみに応答しないということです。神はどんな悪者でも、ご自身に立ち返るなら、これまでの罪を全て帳消しにする憐れみを持っておられます。しかし、本当の悪というのはその憐れみに応答しないことでもあります。ですから、主が御手を上げられて、ご自身がおられるという徴を与えられていても、それでも応答しないのです。このような者たちは、神が御国を立てられた時に、恥じ入り、また火によってなめ尽くしてください、と祈っています。

26:12 主よ。あなたは、私たちのために平和を備えておられます。私たちのなすすべてのわざも、あなたが私たちのためにしてくださったのですから。

これは、義について語っているからこそ、出てくる内容です。神の義があるからこそ、平和があります。これは人間の考える平和とは大違いです。私たちは和を尊びます。ですから、罪を犯している人がいても、その人を、罪を犯したままで受け入れることによって平和を保とうとします。しかし、罪からの悔い改めがなければ、たちまちそこには平和がなくなります。

そして、平和が備えられている理由は、「すべてのわざが、神が備えてくださったものだ」というところに基ついています。自分たちが神のために、神に貢献するために行おうとしていることであれば、それは肉の努力なので必ず争いや妬みが起こります。そうではなく、神の予め用意された良い業があり、それが実現していく時にそこには麗しい平和があります。パウロがこう話しました。「エペソ 2:10 私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」

26:13 私たちの神、主よ。あなた以外の多くの君主が、私たちを治めましたが、私たちは、ただあなたによってのみ、御名を唱えます。26:14 死人は生き返りません。死者の霊はよみがえりません。それゆえ、あなたは彼らを罰して滅ぼし、彼らについてのすべての記憶を消し去られました。

神の民とされた者の告白は、代々の世の支配者の中でも変わらずに、主なる神のみを王として、その御名を唱えることにあります。私たちは教会として、イエスこそが救い主であられ、主であり王であることを告白しているのです。これは、ローマ帝国であった初代教会においても、そうであったし、いつの時代でも全く同じように告白したことです。そして、キリスト再臨後の神の国において、確かにキリストが王とされている姿を見ることができます。私たちは今の時代にある、様々なしがらみや慣習があります。それに従って物事を考えていますが、私たちは神の国の考え方に変えていかなければいけません。

そして 14 節ですが、これは 24 章 1-22 節に書かれていたことが背景にあります。王たちが主な

る神によって牢獄に閉じ込められ、何年か後に出て来て罰せられる、とありました。王たちが再臨のキリストによって滅ぼされたら、彼らは陰府に下ります。ですから、地上での神の御国の千年間は、彼らは自分たちを圧迫した君主たちの記憶で悩まされることはなくなる、ということです。

3B 一時的な苦難 15-21

26:15 主よ。あなたはこの国民を増し加え、増し加えて、この国民に栄光を現わし、この国のすべての境を広げられました。

今、イスラエルの国民のことを話しています。この国民が再臨のイエスによって贖われ、それによって神の国ではイスラエルに栄光が与えられ、その国境は広がられます。アブラハムには、エジプトの川からユーフラテスまでと主は約束されましたが、ソロモン王国以上の広域をイスラエルは所有することになります。けれども、そこに至るまでの道は苦難でありました。

26:16 主よ。苦難の時に、彼らはあなたを求め、あなたが彼らを懲らしめられたので、彼らは祈ってつぶやきました。26:17 子を産む時が近づいて、そのひどい痛み、苦しみ叫ぶ妊婦のように。主よ。私たちは御前にそのようでした。26:18 私たちもみごもり、産みの苦しみをしましたが、それはあたかも、風を産んだようなものでした。私たちは救いを地にもたらさず、世界の住民はもう生まれません。

主が、終わりの日に全地を裁かれますが、その時期に選ばれた民にとっては、苦難の時となります。荒らす憎むべき者が、聖所の中に立つのを見たらならば、ダニエル書にあるように、大きな患難の時がある、あなたがたは山々に逃げなさいとイエス様が言われました。そして、こう言われました。「マタイ 24:21-22 そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。もし、その日数が少なくされなかつたら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、選ばれた者のために、その日数は少なくされます。」この苦難には、特別な計らいが選ばれた民のためにあるのです。ダニエル書 12 章 7 節には、これは聖なる民の力を打ち砕く時であるとあります。つまり、ユダヤ人がその力が砕かれて、ただメシヤ、キリストのみにより頼むようにするのだ、ということです。エゼキエル 20 章 38 節によると、この患難の時は、反逆者は選り分けられるとあります。つまり、ユダヤ人でも主に頼らない者は裁かれ、死んでしまうのです。そしてゼカリヤ書 13 章 9 節によると、ユダヤ人は、三分の二は死んでしまい、残りの三分の一が患難の中を生き残り、主の御名を呼ぶことが書かれています。ですから、ここでの産みの苦しみの表現は、患難を受けている残りの民の呻き声なのです。

26:19 あなたの死人は生き返り、私のなきがらはよみがえります。さめよ、喜び歌え。ちりに住む者よ。あなたの露は光の露。地は使者の霊を生き返らせます。

ダニエル書 12 章 2 節に、患難時代の残りの民だけでなく、これまで主を信じて死んでいった者

たちが、「ある者は永遠のいのちに」至るとあるように甦ります。

26:20 さあ、わが民よ。あなたの部屋にはいり、うしろの戸を閉じよ。憤りの過ぎるまで、ほんのしばらく、身を隠せ。26:21 見よ。主はご自分の住まいから出て来て、地に住む者の罪を罰せられるからだ。地はその上に流された血を現わし、その上で殺された者たちを、もう、おおうことをしない。

残りの民に対する呼びかけです。ユダにいる人々は、荒らす憎むべき者が聖なる所に立ったら、エドムにあるボツラ、今のペトラの方に逃げます。そこで反キリストが率いる軍隊が彼らを押し流そうとするのですが、その水をモアブやエドムの地が飲み干すことを黙示録 12 章が預言しています。その間、偽預言者や偽メシヤが出て来ても、出ていってはならない、荒野にいらっしゃると言っても出ていってはならないとイエス様は言われていました(マタイ 24:23-27)。そして、主は天から戻って来られます。ボツラのほうに向かわれ、反キリスト率いる諸国の軍隊と戦われます。そしてエルサレムにいる住民を救うために向かわれて、そこに攻めてくる軍隊と戦われて、それでオリブの山に立たれます。このようにして、主は残りの民に対して、受ける懲らしめは一時的であり、それは彼らの救いのためであることを教えておられるのです。

聖餐にあずかるに当たって、思い出したいことは、このような神の裁き、患難においても、黙示録においては、この方が「小羊」と呼ばれていることです。「黙示 17:14 **この者どもは小羊と戦いますが、小羊は彼らに打ち勝ちます。なぜならば、小羊は主の主、王の王だからです。また彼とともにいる者たちは、召された者、選ばれた者、忠実な者だからです。**」主は戦われますが、それは、ご自分が既に神の怒りを肉体に受けられた、その呼び名を使われています。小羊なるキリスト、私たちの罪のために屠られた方、この方にあつて私たちは神との和解を果たしており、神との平和をもっています。十字架に付けられたキリストを拒むのであれば、その人はここにあるように、神と戦うことになるのです。